

聖書：Ⅱサムエル6：1～23

説教題：主への恐れと喜び

日時：2018年3月11日（夕拝）

前の5章でダビデはついにイスラエル全体の王となり、エルサレムを攻め取って政治的な中心地としました。次いで今日の章では神の箱をこの町に運び入れて、主がともにいてくださる祝福を確かなものにしようとしています。Ⅰ歴代誌13章にも、この時の出来事が記されていますが、そこにはダビデが隊長たちと合議し、その賛成を得たことが記されています。その際、彼がこう言ったと記されています。Ⅰ歴代誌13章3節：「私たちの神の箱を私たちのもとに持ち帰ろう。私たちは、サウルの時代には、これを顧みなかったから。」確かに神の箱はⅠサムエル記7章に出て来て以来、このサムエル記に登場して来ませんでした。2節にある通り、ユダのバアラにとどまったままでした。そこでダビデはイスラエルの精鋭3万人を集め、新しい車に載せて運び出します。これは彼らにとってどんなに大きな喜びの行進だったのでしょうか。国家統一が果たされ、新しい都に主の臨在の象徴である契約の箱を運び入れようとしています。いよいよ主の祝福が自分たちの上に豊かに臨むだろうと期待されます。5節にある通り、「ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、豎琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で力の限りに喜び躍った」のです。

しかしその歓喜に満ちた行進が一瞬にして悲劇に変わります。神の箱を載せた車を御していたアビナダブの子ウザとアフヨの内、ウザに主の怒りが燃え上がり、彼はその場で打たれて死にます。なぜこんなことになったのでしょうか。それはナコンの打ち場まで来た時、牛が箱をひっくり返しそうになったので、ウザが手を伸ばしてそれを押さえたから、とあります。私たちはこれを読んでどう思うでしょうか。この説明に納得できるでしょうか。私たち人間の感覚からすると、こんなことでウザがさばかれるなんて厳し過ぎる！と思わないでしょうか。ではどうしたら良かったのか。箱が地に落ちるのをただ見ていれば良かったのか・・・。ただただ当惑するような記事です。しかし聖書はその理由をはっきり述べています。7節にウザが打たれたのは「不敬の罪のため」とあります。すなわち神に対する恐れ敬いがなくなった。主の聖さが正しく守られなかったということです。

律法の規定によれば、人は神の箱に触ってはならないし、見てもならないと言われていました。民数記4章5～6節：「宿営が進むときは、アロンとその子らは入って行って、仕切りの幕を取り降ろし、あかしの箱をそれでおおい、その上にじゅごんの皮のおおいを掛け、またその上に真っ青の布を延べ、かつぎ棒を通す。」そして15節。アロンとその子らが聖なるものをすべて覆い終わって後、ケハテ族が入って来て運び出す作業をします。この手順を踏むのは、「彼らが聖なるものに触れて死なないためである」と言われています。また20節には、「彼らが入って行って、一目でも聖なるものを見て死なないため」ともあります。これほどに慎重に慎重を期して取り扱うべきものなのに、ウザは軽率に触れてしまったのです。でも、とある人は言うかも知れません。落ちそうになったものを手で押さえようとしたことくらい、情状酌量の余地があるのではないか。他にどんな方法があったのかと。しかし今見た6節に「かつぎ棒を通す」とあったように、神の箱は本来人がかついで運ぶべきものでした。出エジプト記25章を見ると、この箱の四隅には四つの金の環が取り付けられていました。そこにかつぎ棒を通して運ぶのです。ペリシテ人が前にしたように、車を使って運ぶようなことをしてはならないのです。この本来の規定に従っていたなら牛によってひっくり返されそうになるというような事態などは生じなかった。ここに彼らの軽率さがあったことは否めません。彼らはいっしか主の戒めを軽く考え、主が定められた方法によってではなく、自分たちの頭で良いと考えた方法に従って事を進めていたのです。

ウザ自身も、神の箱が長い間、自分の家にあったため、いつしか馴れ馴れしくなっていたのかもしれませんが。私たちは、落ちそうになったものを手で支えるくらい良いのではないかと思います。すべてを判断されるのは主です。主はウザにふさわしい恐れがなかったことを知っておられます。他の荷物を手で押さえる時と何ら変わらない気持ちで手を出したことを主はご存知です。そこにはやはり「不敬の罪」として責められるべきところがあったのです。

これはウザだけの問題ではありませんでした。8節に「ダビデの心は激し」とあり、9節に「ダビデは恐れた」とあります。そして彼は「主の箱を、私のところにお迎えすることはできない」と言います。彼も主への恐れ敬いにおいて自分は十分でないと感じ、

身の危険を覚えたのです。そこで神の箱をオベデ・エドムの家に回します。せっかく喜びの日となるべき時が、こうして重苦しいムードに包まれる日となったのです。

さて、するとどういうことになったのでしょうか。主の箱がオベデ・エドムの家に3ヶ月間とどまっている間、彼の家は主によって豊かに祝福されました。これが本来の姿です。主は呪いの神ではなく、祝福の神です。主がともにいることは、このような祝福をもたらすことです。そこでダビデは神の箱をエルサレムに運び上ろうとします。ダビデはこの3ヶ月間、自分自身を深く反省させられました。何が間違っていたのか。何があの災いをもたらしたのか……。その彼の悔い改めは13節にも現われています。そこに「主の箱をかつぐ者たちが、云々」とあります。今度は先のように車によってではありません。律法の規定通り、かつぐべき人たちがかついでいます。その彼らが6歩進んだところ、かつてのようなさばきは起こりませんでした。そこでダビデは主の祝福を確信し、感謝のいけにえをささげ、喜びの行進を開始します。14～15節には、ダビデが力の限り喜び踊り、イスラエルの全家は歓声を上げ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上ったことが記されています。

ここに示されていることは主への「恐れ」と「喜び」の正しい関係ではないでしょうか。このどちらかが欠けているならそれは正しい状態とは言えない。先には神の箱を迎え入れる喜びはありましたが、恐れ敬いが欠けていたため、さばきが下りました。一方で、ただ恐れだけで喜びがないなら、それは単なる恐怖であり、主が求める正しい恐れではないでしょう。詩篇2篇11節：「恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。」主の前では「恐れ」と「喜び」は両立するのです。またこの両方が必要なのです。主への恐れ敬いを回復した時、ダビデとイスラエルの喜びは一層大きなものとなりました。聖なる主が自分たちとともにいてくださるからです。それゆえダビデは、神の箱を運び入れる時に、主の前ではねたり、踊ったりしたのです。そうせずにはいられなかったのです。

さて、このダビデの姿を見て、さげすむ人もいたことがこの章の最後に書かれています。そうしたのはサウルの娘ミカル。ダビデの妻となっていた人です。彼女は窓からダビデを見下ろし、心の中で蔑みましたが、彼が自分の家族を祝福するためにやってくると、「イスラエルの王は、きょう、ほんとうに威厳がございましたね。」と皮肉を言いま

した。「ごろつきが恥ずかしげもなく裸になるように、きょう、あなたは自分の家来のはしための目の前で裸におなりになって」と。彼女にとって、ダビデがそのような姿をさらけ出すことはあまりにも品のないことでした。王はもっと威厳を保たなくてはならない。もっと上品でなくてはならない。外見の見栄えに気を配らなければならない。彼女はこれまで王の娘であったためか、そういうことにばかり重きを置いて、ダビデの喜びを理解できなかった。ちなみにここでミカルはダビデの妻なのに、徹底して「サウルの娘」と表現されています。16節、20節、23節でそうです。ここにサウル家の者と、ダビデ家の者とが対比されていると考えることができます。外側のことばかり気にするミカルにダビデは言います。21～22節:「ダビデはミカルに言った。『あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで主の民イスラエルの君主に任じられた主の前なのだ。私はその主の前で喜び踊るのだ。私はこれより、もっと卑しめられよう。あなたの目に卑しく見えても、あなたの言うそのはしためにたちに、敬われたいのだ。』」ダビデは人の目を気にするよりも、主の前で生きていました。そして主が自分たちとともにいてくださることはこれほどに素晴らしいことなのだと言って踊ったのです。最後の23節には、「サウルの娘ミカルには死ぬまで子どもがなかった」と記されています。これは直前の彼女の発言に対する報いとして記されているものと言えます。またこうしてダビデの子孫にサウル家の血が入らなかったことも示しています。ダビデと一緒に主を恐れ、主を喜ぶことを知らないサウル家の者は、その祝福から退けられたのです。

以上のⅡサムエル記6章から私たちは何を学ぶべきでしょうか。私たちも主のさばきを身に招かないように、もっと恐れのおもいをもちようとするのが良いのでしょうか。律法の規定の無視からさばきが起こったことを考えれば、私たちも律法を注意深く調べ、これを正確に守ることに主を恐れるようにすることが大切なことなのでしょうか。ある意味でそうであるとも言えますが、現実にはどこまで行っても不完全さが残る私たちです。果たして神がお認めくださる状態を私たちが保つことはできるのでしょうか。そうして主なる神を安全に私たちの間にお迎えすることはできるのでしょうか。それはむしろとても危険な試みではないのでしょうか。いつウザのようになってもおかしくない私たちではないのでしょうか。しかしそんな私たちには慰めのメッセージがあります。それはイエス様が私たちの代わりにさばかれてくださったということです。まさに私たちの不敬の罪のために。私たちは自分の聖さによって、主のご臨在を確かなものにする

ことができるわけではありません。私たちの望みはイエス・キリストです。神の一人子なるお方、神ご自身であられる方が、人となって私たちのところに来てくださり、私たちの罪の代価を払ってくださった。このキリストの身代わりの死に支えられ、私たちは大胆に神に近づき、神と交わることができるのです。神が私たちとともにいてくださる祝福に私たちが生きることができるのは、主の十字架の犠牲によるのです。このことを良くわきまえ知ることによって、私たちは神に対するふさわしい恐れを持つべきです。

そしてこの恐れとセットで私たちは大いに神の臨在を喜ぶべきです。神がこうして私たちの間にいてくださることは、私たちにとっても、果たしてダビデのように喜び踊るべきこととなっているのでしょうか。ダビデは力の限りに喜び踊りましたが、ミカルは冷たい心で上から見下していました。私たちはこのミカルの方に自分が似ているということはないのでしょうか。外側のことや見た目のことや、人間的な上品さ、人間的評価ばかりを気にして。もちろん常に熱狂的であるようにと勧められているわけではありません。静まるべき時もあります。それぞれの時にふさわしい振る舞いがあります。しかしミカルのように主に対して冷たい心でいることはないか。それでいてこの世の事柄に対しては熱心で、喜び踊るような姿を示しているということはないだろうか。聖なる神がキリストにあって私たちの間にともにいてくださること、このことは私たちの心を動かすものとなっているのでしょうか。私たちもダビデのように、主への恐れを抱きつつ、主がともにおられることを心から喜び、歌い、賛美したいと思います。そしてこの神との交わりに感謝し、この神に信頼して従い、神と共に歩む神の民の特権と祝福に生かされて行きたいと思います。